

年頭のご挨拶



鹿児島市医師会病院 院長

園田 健

あけましておめでとうございます。会員の皆様ご家族及び各医療機関の職員の皆様、ともに輝かしい新たな年をお迎えのこととお喜び申し上げます。

一年を振り返りますと、コロナにあけコロナにくれた一年といえましょう。1月中国・武漢で新型肺炎が発生し、新種のウイルスが検出された際には、もっぱらその独特な生活・食習慣に対して関心が向けられました。しかしクルーズ船での感染勃発、屋形船など次々と起こるクラスター発生、更には高齢者の急激な病状変化、次々と有名人のコロナによる死亡が報道されるに至り、ウイルスに対する脅威が急激に増してまいりました。鹿児島におきましても、英国からの帰国患者に始まり少しづつ感染者が見られ、当院も医師会の依頼により発熱外来に人員を派遣。またPCRセンターも当院医師・職員を派遣して対応いたしました。さらにショウバブでのクラスター発生により、急激な病床数確保が必要となつたことから、当院も急遽コロナ病棟を別館に立ち上げ、HCUの8床分を4床にしてスタッフ半分をコロナ病棟対応といたしました。病院経営においては、感染回避のために検査控えや待機手術の延期など稼働率は4.5.6月と昨年をさらに下回る惨憺たるものでした。更に、厳しい面会制限の必要から退院支援連絡

会議などの開催にも支障をきたし、患者さんのスムースな退院転院などに困難を生じました。

また、一昨年成功裏に終えたラグビーワールドカップに続きオリンピック東京大会の開催に期待が寄せられたのですが、新型コロナの猛威のためやむなく順延となりました。同様にパラリンピック・鹿児島国体も延期とならざるを得ませんでした。このことは感染回避のために外出を自粛している人々をさらに憂鬱な気分にさせるものとなりました。自殺者の増加につながって社会問題となっております。さらに国による支援が間に合わず、倒産の憂き目にあう外食産業は後を絶たず、アルバイトで生計を立てる学生さんたちの生活も圧迫され、休学や退学を考えざるを得ない学生が多数現れ、次世代の社会構成に大きなひずみを生じております。

国内政治では安倍首相の突然の辞任が潰瘍性大腸炎の悪化によるという医療界にとっても一種の無力感敗北感を味わう結果でした。長年の政策課題であった北朝鮮の拉致問題未解決など無念な思いであったと思われます。海外ではアメリカ大統領選でバイデン氏が事実上勝利したところですが、この原稿を記載する時点ではトランプ氏はまだあきらめず法廷闘争に入っている状況です。この間に中国は着々と東アジアに霸権拡大を画策し、尖閣

諸島における領海侵犯や空軍による最大10時間に及ぶ長時間の監視飛行などの示威行為をあからさまにしております。更に中国は経済においても“双循環”という新たな戦略により14億という人口を背景に輸入もこれまでより増大するとして、多くの国とのFTA（自由貿易協定）を結ぶことにより、G7におけるイタリアの如く、友好国を増やす政策を行い、武力によるインド・フィリピン・ベトナムに対する圧力とこの経済政策により世界の霸権を獲得しようと画策しています。バイデン氏は「米国を世界から再び尊敬される国にする」と明言されており、アメリカ一国に徹することなく、国際協調路線へと政策転換してくれるものと期待されます。偶然ですが新型コロナから世界が経済的に疲弊しているさなか、比較的早期に立ち直り経済を主導していく姿を見ると、トランプ氏でなくとも、新型コロナがあたかも中国による秘密兵器であったような気がしてきてしまいます。

北朝鮮の脅威は依然として払拭されており、日韓はいまだに近くて遠い国となっており、徴用工問題など不安要素が山積みです。GSOMIA問題の解決も未だしの感があり、日本の自国防衛努力を強調する論説も大きくなり防衛予算の厖大化等経済への影響が懸念されるところです。

さてコロナ禍のため順延されていた地域医療構想関連会議ですが、2025年を見据えた本格的論議が今後高まっていくと思われます。昨年も申しましたが、急激な統廃合などは大きなストレスを生じ、困難を極めると思われます。その財源など地域医療を考慮したうえでの行政の巧みな指導や協力なくしてはなしえないものと考えます。今回の新型コロナのような新興感染症に対するサージケアを考慮した病床機能も考慮した論議が十分なされることを期待します。

2025年以降も当院周辺のいわゆる地域包括ケアシステム対象地域の医療ニーズは高まり

続けると思われます。我々は急性期・回復期などの現状認識を質的・量的に把握して、昨年度255床から199床（実際の運用は現時点で急性期病棟124床（HCU8床）、地域包括ケア病床（22床）、緩和ケア病棟31床合計177床であります。）といったしましたが、同様の機能を有する公的病院との機能的な統合や、病床の共有など積極的に検討していく必要があるかと考えております。

コロナ禍において定例の医師会連携施設との懇談会を開催することができませんでしたが、今後も可能な限り情報を発信して連携を強化してまいりたいと思います。

上半期の経営状況では、苦しい中、PCRセンター・コロナ病床などの運用による収入増加もあり、キャッシュベースで何とか黒字の状況です。

スタッフに関しては消化器内科に肝臓専門の吳先生が赴任。消化器内科は常勤医師4人で、検査などには余力を蓄えております。脳神経内科は5人態勢が整っております。循環器は少數ながら副院長をはじめとして急患を受けいれ、病床稼働目標を達成し続けています。外科には昨年Uターンで入職された佐々木先生に加え、経験豊富な前田先生が加わり充実しております。

医師会病院は開院以来紹介型病院の基本姿勢を貫いてまいりました。繁栄も衰退も医師会員の皆様のお考え次第です。なにとぞ今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

基幹型研修医には現在2年目の吉永先生が頑張っております。医師会病院を是非ご子弟の研修先に考慮ください。

以上、医師会病院が皆様とともに地域医療のニーズにお応えしていくよう努力する決意を新たに致しまして年頭のご挨拶といたします。今年もご支援をよろしくお願いいたします。